

M・メイスナー著

丸山松幸・上野恵司訳

『中国マルクス主義の源流』

——李大釗の思想と生涯——』

平凡社 1971年 412ページ

I

本書の原題は *Li Ta-chao and the Origins of Chinese Marxism* であり、初刷は1967年に刊行された。標題の示すように、本書は李大釗の思想を中心に、中国におけるマルクス主義の受容とその特色にアプローチした労作であり、アメリカにおける本格的な近代中国思想の研究として、注目に値するものである。

著者 Maurice Meisner は、「訳者あとがき」によれば、ハーバード大学東アジア研究センター員、スタンフォードの行動科学研究センター研究員、ヴァージニア大学準教授をへて、現在カリフォルニア大学で中国史を講ずる人で、「アメリカの中国研究の主流を歩んだ新進の中国研究者」だということである。John K. Fairbank, Benjamin Schwartz, Stuart Schram などのアメリカの中国研究の主流、とくにシュラムから影響をうけていると思われる。この研究を行なうにさいして、著者はフォード財団外国研究奨励金などの援助をえており、10年まえにわが国の東洋文庫などにおけるアメリカのアジア財団・フォード財団資金導入問題——いわゆるA・F問題——をめぐって行なわれた中国研究者の討論のなかで明らかにされたアメリカの中国研究体制を代表するものといつてさしつかえない（訳者の1人である丸山松幸氏はこのA・F問題をめぐる討論に重要な役割りを果たした人なのだから、この点についてあとがきでふれてほしかった）。そのことは本書の叙述のなかにも色こく影を投げかけているように思われる。

本書の内容は、序論と「第一部 中国におけるマルクス主義者の形成」、「第二部 マルクス主義の再解釈」、「第三部 政治活動」の3部にわかれ、全部で11章から成り、李大釗の伝記と思想形成を追って叙述され、「エピローグ」で結ばれている。そしてかなりくわしい原注と訳注がつけられており、訳注では著者の資料誤読や不正確な要約が指摘されている。

II

本書の意図は、「序論」によれば、「中国最初のマルクス主義者李大釗の思想的変遷の研究」であるが、同時に「中国におけるマルクス主義思想の初期の受容と変容の研究」（15ページ）でもある。著者がとくに李大釗をとりあげたのは、かれが「単にマルクス・レーニン主義を導入しただけではなく、やがて現われるその改変の先駆者であった」（14～15ページ）からである。マルクス・レーニン主義の「改変」というのは「マルクス主義の主意主義的(voluntaristic)な解釈と戦闘的な民族主義(nationalism)の結合」（15ページ）のことであり、このようなマルクス主義解釈はその後のすべての中国共産主義指導者、とくに毛沢東に深い影響を及ぼしたと考えられている。

第一部は李大釗の誕生とその当時の中国とくに華北の状態からはじまって、かれの生い立ちと思想形成を追って、どのようにしてマルクス主義に接近し、これを受容したかをのべて、五四運動や共産党成立の時期にまで及んでいる。その間多くの興味深い考察がみられ、たとえば、李は幼少のころ伝統的教育をうけ、のちに西洋風の教育をうけたが、「どうしても覆さねばならない理由のないかぎり伝統の様式に適應してゆくのが李の特徴である」（25ページ）という。かれの儒教的価値体系への反応は、一世代まえの知識人とはことなり、「伝統的世界観と近代西洋との対立は李の場合さほど深」（26ページ）くなく、伝統をいかにして近代世界に適用させるかに腐心せず、「伝統を批判し、そのさまざまな部分あるいは受け容れ、あるいは拒否し、また、ふさわしいと考えて受け容れたものを利用するのに比較的自由的態度を取っていた」（同前）点に注目している。ここでは李と陳独秀との対比が意識されている。のちに著者は李が「正統マルクス主義」から「逸脱」したのに対し、陳はむしろそれに忠実であった点をくりかえし強調するが、ここにはすでにその伏線がしかれている。

義和団運動からうけた影響についても、やはり李と陳が比較されている。義和団の大衆的排外運動および外国軍隊の義和団鎮圧によって生じた排外感情は李の世界観に消しがたい影響をあたえ、それがのちの李と陳の義和団評価のちがいの原因となったことが指摘されている。

李は若いころ、技術や科学を専攻せず、経済学をえらんで、みずから「富貴利禄」への道を捨て、「国家と人民に奉仕する」という理想を実行する場所を政治に求めた。この点に関する著者の考察はおおむね妥当であるが、初期著作の分析については不十分な点が多く、「伝統思

想」の内容を十分検討することなく、単純に西洋近代思想と対比しようとする。だから、たとえば、李が「民衆と政治」などにおいて代議政体・議会制を主張しながら、「自分が中国の伝統とは全く無縁な、西洋からの輸入品を唱道しているに過ぎないということ認めようとしなさい」(60ページ)こととの矛盾が指摘されるが、しかし李はこれらの文章で、中国は西洋諸国にならって議会制を採用すべきである、ととくに主張しているのではない。李は議会制が「民衆」を政治にあらわす制度であることを認めてはいるが、かれの最大の関心事は、どのようにすれば中国で「民衆」を政治にあらわすことができるか、という問題であり、その問題を解決するために、中国で「民衆」の政治への発露をさまたげているものは何かを徹底的に追求したのである。しかるにこの著者はこのような李の問題を十分にうけとめていないし、そもそも李が「民衆」ということばによって何をいおうとしているのかも深く分析しようとしていない。そのような問題はほとんど著者の関心外にあるようにみえる。

「民衆と政治」となる初期の代表作である「青春」は、当時のきわめて悲観的な政治・社会状態のもとにあつて、「政治能動主義的・民族主義的・楽観主義的傾向」の哲学的支柱を見出そうとしたものであり、同時に、著者の関心からいえば、西洋思想の影響下に伝統的諸価値から離れようとしていたときに、伝統的諸価値への「民族的愛着を維持したい」という要請を満足させるのを助けた」のであつて、中国の伝統が捨てられ、西洋の思想・文化にとって代わられることを拒否する役割りを果たすものだと考えられている。

ロシア革命およびマルクス主義の受容の仕方の問題にはいると、著者は清末以降のマルクス主義受容過程のなかで李を位置づけ、李以前に「マルクス主義的社会民主主義の伝統」が欠如していたこと、したがって李をふくめた当時の知識人は「マルクス主義世界観の基本的^{ベーシック・アサン}仮定^{アサン}さえ知らぬままに」ボルシェヴィキ革命のよびかけに呼応した、という。そして李は「マルクス主義者である以前に多分に「トロツキスト的」であり、キリアスティックな感情が強く、「毛沢東主義」の先駆者」であつた。つまり、李および中国のマルクス主義はその当初から「正統マルクス主義」から「逸脱」していたことがとくに強調され、後章への伏線となっている。

この点は李の「人民主義的性格」を論じて、ほぼ軌を一にする。ここではまずロシアにおける人民主義とマルクス主義の発展とその相互関係についてのべ、人民主

義運動は歴史発展における民族的独自性の仮定を採用していること、歴史における能動的要素は自覚的な目的意識をもった知識人であると考えていたこと、人民主義者とマルクス主義者とは世界観や政治・経済諸力の相互関係の認識、とくに革命における農民の役割りについての認識の相違があること、などを論じたのち、李の「青年と農村」を引いて、かれとロシアのナロードニキとの類似性を強調している。その類似性は農村と農民に対する認識、民族主義的色彩、革命的主義主義などにあらわれており、李の導入した「人民主義的性格」は中国マルクス主義運動の強力な一潮流となつた、と著者は考えている。

第一部の最後では、はじめに李の「わたくしのマルクス主義観」という長篇論文に考察を加える。著者が関心を注ぐのはここでもやはり「正統」からの「逸脱」であつて、李が「マルクス主義の政治活動と人間の意識性の重要性を強調する要素」をうけいれ、「決定論的側面」には批判的であること、したがって歴史創造における意識的な政治活動の役割りをとくに強調する階級闘争の理論に対しては鋭く反応しており、その反面、唯物史観にはあまり好意をもっていないこと、などをのべ、さらに李の唯物論理解のあいまいさや労働価値説への批判にもふれている。それからさらに五四運動とそのなかにおける知識人の行動・言論について概観し、それに先立つ新文化運動が自由主義的国際主義の運動であつたのとちがひ、五四運動が革命的民族主義者の運動であつたこと、この運動が労働者にひろがるなかで、マルクス主義の妥当性と説得力が認められるようになったことをのべている。

五四運動と前後して行なわれた「問題と主義」論争については、「論争の核心は、中国の問題は政治革命によって解決さるべきか、それとも緩慢な、漸進的な、本質的に非政治的な社会改良によって解決さるべきかという、より現実的・直接的な問題であつた」(154ページ)として、問題を論壇的次元だけでうけとめており、李が意識していた大衆運動に対する態度の選択の問題に全くふれていない。そしてさらに著者は、この論争の背後にひそむものとして、マックス・ウェーバーの「究極目的倫理」と「責任倫理」(『職業としての政治』)とのあいだの選択をあげ、さらにこれを「学者の生活と政治家の生活との間の選択の問題」(157~158ページ)といいかせているが、著者は中国におけるアカデミズムや論壇・文壇が相対的にも政治・社会から独立しては存在しえない現

実に十分な考慮を払っていないようにみえる。

第一部は中国共産党成立の事情とその当時のマルクス主義理論上の諸問題の考察をもっておわる。

第二部「マルクス主義の再解釈」はこの研究の本論ともいうべき性格をもっているが、そこでの問題意識は第一部の論述と基本的に同じである。この部分は「決定論と能動主義」「歴史哲学」「民族主義と国際主義」の3章から成り、李大釗・毛沢東などにみられる中国マルクス主義の特色、とくにその「正統」からの「逸脱」が、西欧・ロシアのマルクス主義との比較によって、くわしく論じられている。この部分も第一部におとらず、さまざまの問題をふくんでいるが、それについてはあとでふれたい。

第三部「政治活動」は「レーニン主義と人民主義」「民族革命」「農民革命」の3章から成り立ち、ここでは中共創立以後、主として国民革命期の李の政治活動と理論的思索が考察の対象となっているが、陳独秀との相違や「正統マルクス主義」からの「逸脱」に関心が向いている点は、これまでと変わりがない。この部分でとくに注目すべき点は、李が中国は「プロレタリア民族」であるとして、「潜在的プロレタリア性」を中国人民全体にまでひろげている点を取りあげて、これを李が一貫してもっていた「民族主義」と関連させていることである。李は国民革命を民族革命としてとらえ、民族革命達成のために、かれは国共合作を積極的に推進する。元来民族革命というのは、世界革命の退潮期にあつて、コミンテルンがソ連の国家利益擁護のために考え出した一つの戦術であるが、李はこれを単なる一つの段階・戦術とはみず、不可避的に世界革命へ合流する不断の革命過程とみていた。李にとって国民革命はプロレタリア的、社会主義的なものであった。このことが李をして、コミンテルンや党中央委の政策から「逸脱」して、いち早く国共合作を事実上放棄せしめ、かれは共産主義運動を支持する新しい大衆的基盤を農村革命の力に求め、農民協会の組織を促進して、農村における階級闘争の担い手とするとともに、哥老会・紅槍会など古くからの秘密結社の革命性を高く評価し、これに依拠することをためらわない。ここでも李の思想が「正統マルクス主義」やそれに近いと考えられている陳独秀や瞿秋白と対比されるが、この辺の論述は思想分析が李の政治活動の考察とかなりよくかみあつていて、本書のなかでは比較的精彩的に富む部分である。

最後の「エピソード」では、李の張作霖の軍隊による

逮捕・処刑の事情についてのべたのち、本研究の論点を、とくに李と毛沢東の思想的関連を中心として要約している。李はキリアスティックな感情を毛に伝え、毛は李の「民族主義的・人民主義的・ボルシェヴィキ的思想」を「忠実に祖述し」、その後数年間毛のマルクス主義理論の扱いは李の設定したパターンによつた。そのパターンとは「革命的^{ヴォランタリズム}主義と中国民族主義^{ナショナルイズム}の結合」であり、唯物史観も階級闘争理論もすべてその理論的支柱として利用されている。したがつて階級闘争においても、プロレタリアそのものよりも「プロレタリア意識」が重要視される。「民族主義」は、すでにふれたとおり、李が以前からもっていたものであるが、毛らが農村にはいったことによつていっそう強化されたと考えられている（どのようにして強化されたかについては、明確な説明があたえられていない）。

以上でこの研究の内容紹介をおわるが、何分にも資料を豊富に駆使した大論文であるため、個々の論点にくまなくふれることができなかつた。また、紹介の仕方も、第一部についてはややくわしく、第二・第三部は簡略になった。これは筆者の関心のしからしめたところでもあるが、同時に、本書の問題のたて方がはじめからきまつてしまつているためでもある。もちろん論述のすすむなかでさまざまな問題について考察が加えられてはいるのだが、それはあらかじめ設定された問題の大わくから少しもはみ出すことがない。だから主要な問題は第一部でほぼ出つくしており、第二・第三部でその問題がさらに豊かな展開をみせるということはほとんどみられない。本書に一貫しているのは、研究対象から豊かに問題を引き出そうとするよりも、むしろ最初に設定した基準と枠にしたがつて対象を処理する態度であり、それは著者の立場・観点と深くかかわっていると考えられる。

III

すでにみたように、この研究では中国マルクス主義が「正統マルクス主義」からいかに「逸脱」していったかを明らかにするために、^{ヴォランタリズム}「主義主義」（能動主義）と「民族^{ナショナル}主義」を軸として、李大釗の生涯とその思想に考察を加えたものである。文献・資料を豊富に駆使して(注1)、実証的に伝記的研究を行なつており、そこに本書のメリットがあると思われる。だが本書がもともと意図している思想研究についてはさまざまな問題点をふくんでおり、中国思想研究を志すものにとっては、本書はまさによき反面教師となりうる。

この書物を読んでいて大変疑問に思ったのは、著者がしばしば用いている「民族主義」の意味とその考察方法である。著者はこのことばをときには「近代的民族国家」の意味に用いたり、ときには「排外的感情」の意味に用いたりして、あいまいな点をのこしている。たしかに李や毛にナショナルな要素が存在しているのは間違いないし、その点で李と陳独秀との相違を指摘することもあやまりではない。しかし著者が李の「民族主義」について論ずる場合、そこには次のような二つの前提がある——①「民族主義」とは元来中国の伝統に根ざす保守的なものであること(注2)、②それは「国際主義」と対立し、マルクス主義を受容するにさいしては、マルクス主義のもつ国際主義をゆがめている。——このような前提に立つかぎり李が「中国民族主義と世界社会主義の一体化」をめざしても、それは「民族主義的動機から国際主義的イデオロギーを採用し、それを民族主義的目的に用いるという中国知識人の「逆説」(241ページ)にほかならならず、かかる李の「民族主義」的偏向は李の「正統マルクス主義」からの「逸脱」をもたらしている、ということになる。

ここで「民族自決権」についてのレーニンの諸論文を引用して、マルクス・レーニン主義が被圧迫民族の解放闘争をどのように理論づけているかをことあらためて説明することは不必要であろう。李の思想に即してみても、民族主義と国際主義とはかれの思想のなかで不可分な要素となっている。かれはあらゆる弱小民族を強制的に自己の市場圏内にくみこんでいこうとする資本の「国際」的要求を被圧迫民族の立場で拒否し、これに抵抗するために被圧迫民族同士の国際的連帯を強く求めている(もちろん筆者がここでいう国際主義や国際的連帯はメイスナーが使っている意味とことなる。メイスナーは「国際主義」ということばもかなりあいまいに使っている)。そのことを認識しないかぎり、李の主張する「新アジア主義」の内容を理解することも全く不可能となるはずである。

民族主義と国際主義とがこのように不可分に結合しているのは何も李だけに固有な特色ではなく、たとえば章炳麟や孫文の民族主義にも、それぞれ発想のちがいはあるが、やはり国際主義との結合がみられ、清末にアナキズムの論陣をはった劉師培でさえ民族解放への要求は強烈なものがある(注3)。李の思想もこのような潮流のなかで考察すべきであって、思想史研究をほとんど欠いているところに本書の大きな欠陥の一つがある。

本書の「民族主義」の扱いにあらわれているもう一つ

の問題点は「みずからを普遍的なる文明の立場に置き、「研究対象と自己との関係および認識主体としての自己をも批判の対象とする真の意味の客観性を意識しない態度」(「訳者あとがき」40ページ)である。著者の基準からすれば、「民族主義」は伝統的・保守的な、否定さるべきものと考えられ、しかもこの基準は動かすべからざるものなのである。この基準そのものを一度うたがうことなしには、李の思想が理解不可能となるのは、すでにのべたとおりだが、この基準をうたがうことは著者自身の立っている立場をうたがうことになり、たしかに場合によっては自己を危険な深淵につきおとすことにもなりかねない。けれども同時に、そうすることによって、新しい可能性をきりひらくこともできるはずである。だが著者はそこで立ち止まって、少しも動こうとはしていない。

同様のことは、李がうけたアナキズムの影響の分析についても指摘できる。著者はアナキズムをおもにテロリズムとしてとらえ、否定すべきものと考えて、李がアナキズムからあまり影響をうけなかったことを強調している(注4)。たしかに李がテロリズムに走らなかったことについては議論の余地がないが、そのことは李がアナキズムから何ら影響をうけなかったことを意味するものではない。李のちに五四運動のころ書いた「我と世界」という短文では「われわれが現在求めているのは解放された自由な自我と、だれもが愛しあう世界である。我と世界のあいだに介在する家や国、階級、民族の区別はすべて進化の障害、生存の重荷であるから、しだいに除去すべきである」(『李大釗選集』221ページ)といっている。ここには、アナキズムの影響がはっきりとあらわれており、しかもそれが李の思想の重要な要素となっている。これは何も李だけではなく、1920年代のアナ・ボル論争にもみられるように、当時の労働者・知識人に対するアナキズムの影響は一般に大きく、毛沢東などもその例外ではない(注5)。もちろんその影響のうけ方やその意義づけについては慎重に考えなければならないが、アナキズムの影響を無視しては、中国の初期におけるマルクス主義受容を語ることはほとんど不可能であろう。

「伝統思想」の扱い方についても事情は同じである。本書では一貫して、「伝統」がほとんどまると否定されている——若干の例外はあるが——ため、李が伝統思想から何を捨てて何を取ったか(注6)が明らかにされず、伝統思想による西洋諸思想との対決を通じて西洋思想を血肉化していく李の思想の特色も、一向に浮かびあがっ

てこない。そこで、著者のこのような発想からすれば、陳独秀=進歩的、李=保守的というパターンができあがってしまい、このパターンが李と陳の比較においてたえずつきまとうことになる。

本書を読んでいて感ずる疑問点は実に枚挙のいとまもないほどなので、こまかい点については省略せざるをえないが、もう一つだけ、「主意主義」・「能動主義」の問題にふれておきたい。著者は李および毛の思想に「主意主義」的・「能動主義」的傾向が強いことに注目し、この点をも中国マルクス主義の「正統マルクス主義」からの「逸脱」の例としてあげている。李や毛にこのような傾向が強いことはたしかであり、とくに毛については「主観能動性」として従来から注目されており、中国マルクス主義の最大の特色の一つがここにあることはまちがいない。だが「主観能動性」にアプローチしようとするればそれが李・毛らや人民大衆のさまざまな実践活動とどのようにかかわっていたかを明確に把握することがぜひとも必要である。そうでなければ、著者のいう「主意主義」「能動主義」は一体単なる主観主義・冒険主義などとどこがちがうのかわからなくなる。そもそも李や毛の思想は実践活動とともに発展していく思想であって、李の場合、その特徴はとくに五四運動以後強くあらわれるが、初期の思想についてもその特徴ははっきりしている。ところがこの著者の関心はもっぱらイデオロギーが政治活動を規定する面だけに注がれていて、実践活動が思想を発展させる面については、眼を向けようとしなない。そして、「主観主義」「能動主義」についても、著者は李や毛の「正統マルクス主義」からの「逸脱」を指摘するにとどまっている。近代中国思想史における「主観能動性」の意義を追求することは今後のわれわれにのこされている大きな課題である。

ほかにも問題点は大変多いが、それらの大部分は「訳者あとがき」で指摘されている著者の態度にその根源があると考えられる。本書を読むことによって、筆者は中国思想研究もしくは思想研究一般のもつ困難さ、とかくアカデミズムのなかで研究者がおちいりがちな陥穽について反省させられた点が多かった。アメリカのアカデミズムのなかで中国革命やその思想を研究すること自体がもっている矛盾は、われわれ日本人研究者にとっても、全く無縁なものではない。そうした意味で、本書はわが国における中国研究の反面教師としての意味をもちうるであろう。

訳文全体を原文と対照して検討することは残念ながら

できなかったが、筆者の対照しえた範囲では、訳文はおおむね正確で、よくこなれている。

(注1) ただし原書に付されている‘Bibliography’(訳書には省略)には日本人の筆に成る研究文献は里井彦七郎氏のものだけが記載されており、その他の論文は参照されていない模様である。

(注2) 著者は李の「民族主義」が義和団の影響をうけていることに注目している。このことはまちがってはいないが、著者は義和団を「国際主義」に反逆する保守的・衝動的な排外運動とみていると考えられる。このような義和団に対する見方が、この著者の「民族主義」ということばの使い方と密接に関連していることは、たぶんまちがいなさう。

(注3) 近藤邦康「章炳麟における革命思想の形成——戊戌変法から辛亥革命へ——」(『東洋文化研究所紀要』第28冊所収)、拙稿「孫文における三民主義の展開・付記」(『歴史評論』No.199所収)、劉師培「垂州現勢論」(小島晋治訳・解説『中国』第99号所収)などを参照。

(注4) もちろん著者も、李がマルクスの階級闘争理論とクロボトキンの相互扶助理論とを「調和」させようとしたことは認めている。李は「クロボトキンの理論に、社会進化論に対抗する武器を発見しただけでなく、階級闘争理論を改変してこれを意識的な人間の活動の有効性についての自身の見解に適合せしめることによって、マルクス主義に含まれている決定論的内容を弱める武器をも発見した」(196ページ)し、また「潜在的な“プロレタリア”性の範囲を実質的に中国人民全体にまで広げるためにマルクス主義を再解釈するに際して、この“相互扶助”理論を採り入れた」(276ページ)と著者は考えている。なお、民国初年のアナキズム運動は、劉師復にみられるように、禁欲的生活態度・サンディカリズム・共産主義・「世界大同」などがおもな主張であった。「晦鳴録編輯緒言」(『晦鳴録』[のちに『民声』]第1期所収)参照。

(注5) 毛沢東「民衆の大連合」(斎藤道彦翻訳・解説『歴史評論』No.248所収)参照。

(注6) 李は初期において龔自珍や譚嗣同、とくに後者から強い影響をうけていると考えられるが、そのことが李の思想形成にどのような意義をもっていたかは、本書では全く追求されていない。

(横浜市立大学文理学部助教授 伊東昭雄)